

特216
P62

本讀裁洋 マア
アユチ

卷 壹 第

纂 編 院 學 裁 洋 ラ ラ ク

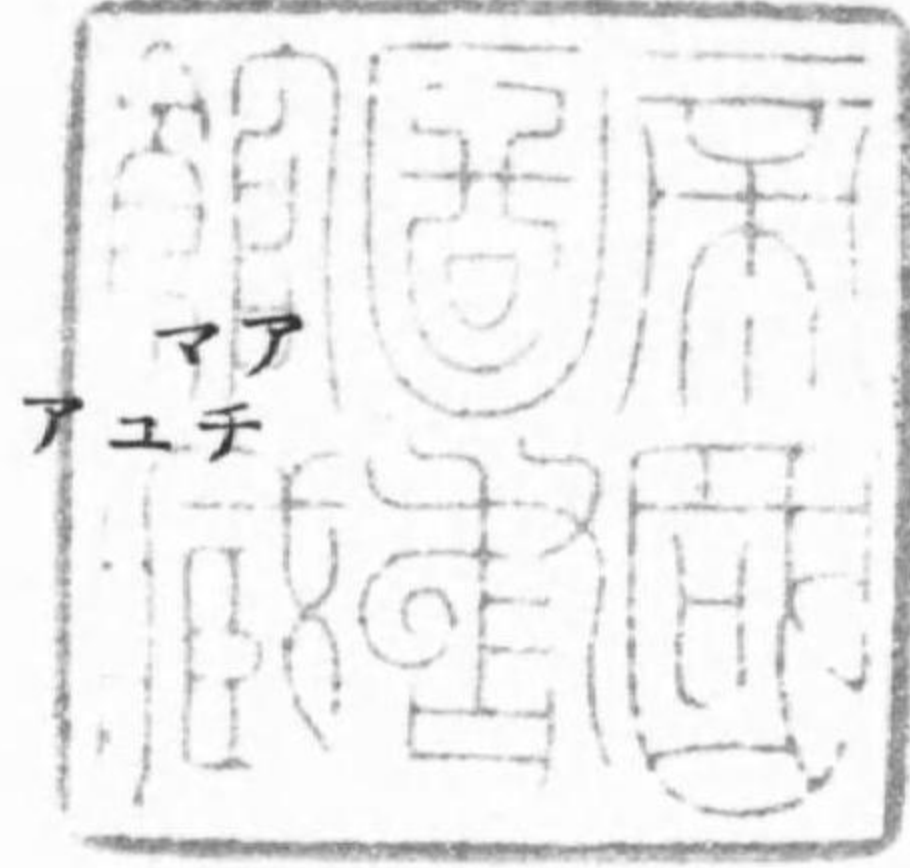
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 18 8 0 1 2 3 4 5

始



特 216
862

本 讀 裁 洋
卷 一 第



部 版 出 院 學 裁 洋 ラ ラ ク



は し が き

この書物は家庭洋裁婦人の参考書として相當大きな役に立つものと思ひます。第一普通の洋裁本の様に難澁でなく、極めて平易に説明されてゐます。それに特にお薦めしたいのは、今迄の洋裁本に書いてない目新しい事が集軒されてゐる事です。家庭洋裁婦人はそれ／＼どちらかの洋裁學校で充分習得された方が多いと思ひますが、そうした方には今迄習ひ覺へた正規の知識以外の珍らしいものを提供すると思ひます。同時に初歩の教課から説明してありますから、學校で正式に教はる機會のない人々には誠によき講義録ともなります。私共編輯室が多忙の中にも押して編輯印行した譯もそこにあるのです。

本書は Agnes M. Miall と云ふ専門家がロンドンで出版した "Home Dressmaking" の抄譯を元にして、編纂したものです。外國でのやり方ですから、我國のアマチュアに直接必要のないことも書いてありますので、そうした點は取捨選擇致しました。そして記事中必要と思はれる個所には「註」を入れて置きました。

教科書にして普通ありきたりの教科書でなく、参考書にして非系統的な参考書でもなく、要するに、家庭に居ながら洋裁の知識とかんどころを教へてくれる親切な家庭教師の役を本書にさせたいと思ひます。

昭和十一年八月

クララ洋裁學院 編輯室

目次

第一章 型紙の使ひ方……………一

第二章 裁つ時の心得……………六

第三章 「袷」^{しつぷけ}と標付け^{しるし}……………二

第四章 假縫……………一八

—以上第一巻—

續刊内容

第五章 縫目とダーツ……………第十四章 レース飾付ランヂリー

第六章 プレツスの秘訣……………第十五章 下着の刺繡

第七章 袖の付方……………第十六章 オーバーオールとブラウス

第八章 首廻りとカラー……………第十七章 スカーツ

第九章 カフスと袖口……………第十八章 ホーム・メイド・コート

第十章 飾……………第十九章 附屬品

第十一章 上着とポケット……………第二十章 ベビー服

第十二章 裾……………第二十一章 子供服

第十三章 下着……………第二十二章 古服の仕立直し

第一章 型紙の使ひ方

型紙と云ふものはある基本的な大きさに裁つてあるものですから、極めて四肢の釣合のとれた若い人だけにすぐあてはまるだけで、大抵の人はそれが完全によく身體にあふかどうかを確かめ、何等かの修正をしなければいけません。

型紙が身體に適ふか適はぬかを調べるには先づ何よりも、肩巾、ドレスの丈け、それに袖丈けが適つてゐるかどうかを調べて見る事です。身體の周囲の寸法、例へば腰廻り、細腰廻り、胸廻りと云ふ様な寸法は、第二義的なものと云へます。と云ふのは型紙は半身について作つてあり、型紙として巾は既にきまつてゐるものですから、巾が身體に適ふかどうかを測つて見る程の事はありません。

とにかく寸法は可成り度々測ることです。人によると一寸の間に多少とも身體が肥つたり細目になつたりしますから、寸法をとつた場合はそれを記帳して置いて、型紙を用ひる度毎に、その寸法が今でも變つてゐないかどうかを調べて見るのがいゝのです。



第一圖 最も主要な寸法十個所圖解

正確な寸法が判つて了へば、型紙のどこを大きくしどこを縮めると云ふ點が直ちに判つて來ます。曖昧な點はどこにもありません。至極はつきりして

ります。

寸法をとるに非常に簡単にしかも素早くとるために、十一の法則があります。

(一) 寸法は残らず記帳し日附を記して置きます。家族の何人もの寸法をとつた時には、一々名前を記して置いて、どんな些細な點にも記憶に任して記帳を忘ることは嚴禁です。

(二) 寸法はびつたりと適つた着物の上から測ります。ドレスを脱いで下着の上から寸法を取るのです。その際コルセットは新しいよく身體に適つたものに限りません。

(三) 寸法は直立の姿勢でとりますが、軍隊式な硬直した姿勢では反つていけません。姿勢は正しい姿勢でなければなりません、あくまで自然の形であることが必要です。

(四) 事情が許せば、自分で自分の寸法をとらずに、他人にとつてもらふのがいいのです。その人が慣れてゐない場合には、鏡の前に立つて自分で一々指示注意してとらせます。

(五) テープ尺は二本使ひます。一本は細腰廻りに巻き付けて細腰の位置を正確にきめて置きます。もう一本は各部分を實際に測るために使ひます。

(註) 細腰のテープ尺の代りに、便宜その場にある紐で代用する事もあります。テープの方がしつかりと身體にくっ付き、その上水平になつてゐるかどうかが一目瞭然ですから、正確で便利です。

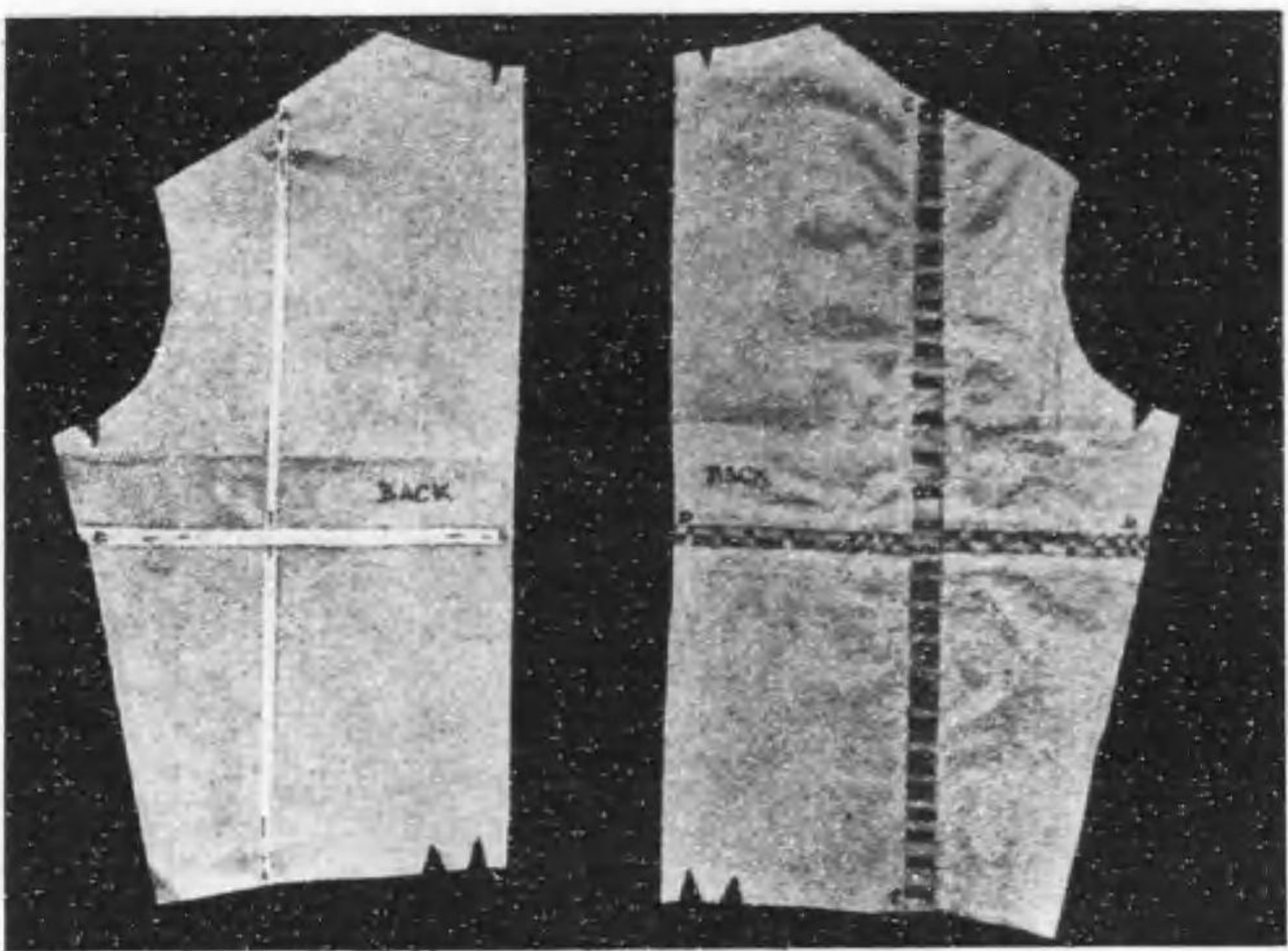
(六) 後から胸巾の最も広い部分を測ります。その際、テープの下に二本の指が、挿し込める程度にゆるく張つてとることを忘れぬように。

(七) 細腰廻り(身體の)に巻き付けたテープ尺の長さを正確に測ります。着るドレスの細腰がどうあらうとそれは別問題です。かなりテープをきつく張つて測ります。

(八) 腰廻りを最も広い部分で測ります。その部分は人によつて細腰の下一五種乃至二三種の處にあります。

(九) 頸廻りを咽喉の付け根の部分で測り肘廻りを關節の部分で曲げて測り、手の寸法は手首の部分と握り拳の最も巾の広い部分とを測ります。

(註) 握り拳の代りに拳を開いて真直ぐにし、その一番巾の広い處を測るもいと思ひます。袖に手が通ればいいのですから。



第二圖 型紙の巾と長をつめる方法(左)と擴大する方法(右)

(十) 細腰から上下に一切の寸法を測ります。例へば前と後のスカートとボデイス(胴部)の丈

けがそれです。細腰に巻付けたテープ尺を規準として測るので、その際細腰線が常に正確なレベルにあるかをたしかめつゝ測つて行かねばなりません。

(十一) 洋裁専門家は、寸法を約二十位とるのですが、素人の洋裁家にはそんなにとると反つて混亂してしまいます。型紙を修正し身體に適はせるために普通主として必要なものは、

- 1、胸廻り
- 2、細腰廻り
- 3、腰廻り
- 4、袖ぐり
- 5、肘廻り

6、前（フロント）（後の衿首から肩を越して前の中央を細腰まで）7、内袖丈（腕を伸ばして脇の下から手首まで）8、9、前丈けと脇丈け（細腰より床まで）10、肩（頸より腕の天邊まで）——第一圖参照。

こうして寸法を記帳してから、型紙の上にそれぞれの寸法を合はせて見れば、その型紙が適ふか適はぬかが直ぐさま判ります。その際修正が一二の點ですめば、譯ない話ですが、こゝもかしこもと云ふ風ならば、別のサイズの型紙をもつて來る方が結局いゝこととなります。

大體型紙と云ふものは腰の部分を修正するのは容易ですが、細腰より上の部分、例へば頸廻りや胸や袖ぐりや袖などを修正するのは面倒ですから、既成の型紙を求めて裁つ時は勿論の事、自分で一々型紙を作る際にもこの點を忘れぬ様に。

愈々生地を裁断すると云ふ前にもう一遍、前記十の寸法の内1、3、6、7、10、の寸法だけは適つてゐるかどうかを再調すべきです。その他の寸法はこの程度の時にはそれ程の事ありません。

型紙は、適はないと思ふ部分の處で二つに斷ち割つて、必要なだけの巾を別な紙で作し、それを割つた中にはめて糊付をすれば、大きくすることが出來ます（第二圖参照）又型紙をせよめるには必要な巾だけ折つて襷をとり、それをピンで止めればいゝのです。（第二圖参照）

但しこうした簡単な伸縮をする際に忘れてはならぬ事は、常に全體の均勢を破りはしないかと云ふことに注意することです。例へば脊の高い人が、單に細腰や裾の部分に縫代を深く残して、スカートの型を長く伸ばしたとすれば、それは全然ぶつこはしです。なぜならば、高い人のスカートを長くするのは、スカートの上邊や裾の部分だけではなく、中間の部分も、即ち細腰から腰迄の長さ、腰から膝までの長さもそれ相

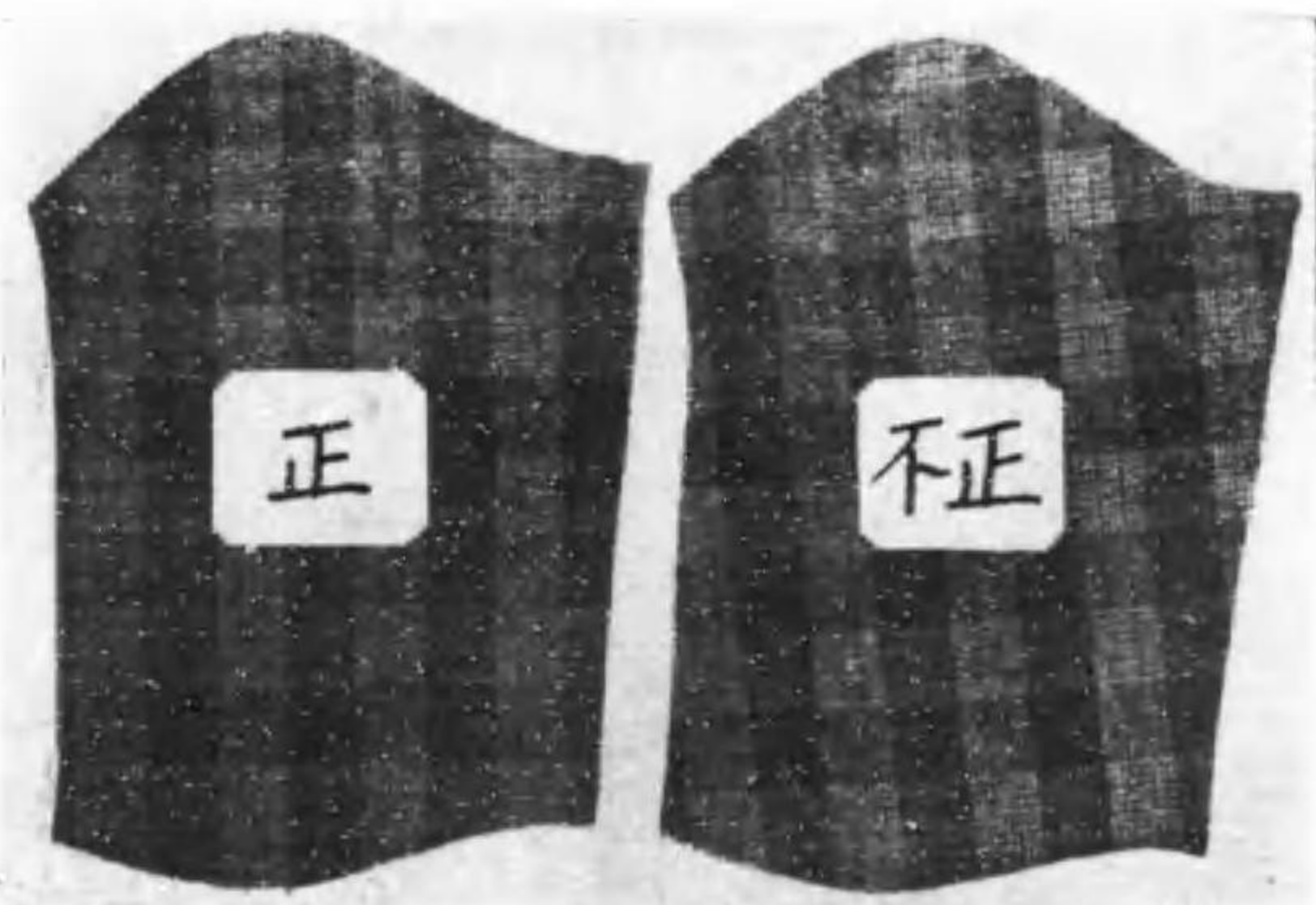
應に長くして行かねばならぬものだからです。

ですから型紙を修正する時には、自然の身體に相應して、型紙を各部分に分けて、その各々の部分に釣合よく伸縮せしめなければなりません。従つて例へば袖が二・五種だけ長過ぎたとすれば、肩と肘の間で五耗だけタツクをし（二倍になりますから結局一種になります）そして肘と手首との中間で残りの五耗をタツクすると云ふ譯です。又スカートの裾が短か過ぎるとなれば、つぎ足すべき丈けを、三つに分けて、一つは腰廻りに一つは股の下の中途の部分に、一つは裾に紙を貼りつけて伸ばす様にします。

丈けの問題はそれとして巾に就ても、矢張り同様に云へます。例へば腰廻りで型紙を擴げようとするならば、前後脇その他腰を圍む一切の部分に紙を貼り足して行きま

す。それをもし前と後とだけでつぎ足して、脇をそのまゝにして置けば、縫目が變な處に來て、ドレスの形も線も臺なしになります。

型紙の頸廻りは修正しない様にして下さい。それは大體胸部の前、後の部分にタツクしたり切り開いたりすれば、必然的に頸廻りに變化が來ますが、斷じて頸廻りを斷つてはいけません。この部分の修正は假縫の際にするのが一番いゝので、それは後編で説明する筈です。袖ぐりに就てもその通りです。



第三圖 正しく裁つた袖と間違つて裁つた袖、
（格子縞の方向に注意の事）

第二章 裁つ時の心得

ドレスを仕立てると云ふことは誰でも出来る事ですし、美しい色合と附屬品とを選ぶことも大抵の人なら出来ませう。然し美しいすつきりした線、着る人の姿を引立たせる輪廓、しかもそれでゐてファッションを崩さないと言ふ様なものは、これは掛つて裁断の技術如何にあります。

裁断だけは断じてごまかしはきゝません。裁ちそくないの缺の跡と云ふものは、どんなに美しい生地を使つて絢爛目を奪ふと云ふ譯でごまかそうとも、或は又縫方をどんなに上手にしこなそうとも、そのまづい缺の跡と云ふものは必ず目立つて残るものなのです。そこで家庭洋裁家にとつての鐵則とも云ふべきものは

「裁断は最後の一缺まで注意に注意を重ね、あはてずにゆくつりと、餘事を考へず一心不乱に」

と云ふのがそれです。

間違へずに裁断をすると云ふ事は、何も別に、腕達者の人でなければ出来ないと言ふ譯のものでもなく、又充分に経験を積んでなければ不可能だと云ふ譯のものではありません。秘訣も何もないのです。唯、注意、細心、一心不乱、この三つを守りさへすれば、それで立派な裁断家になれる筈です。

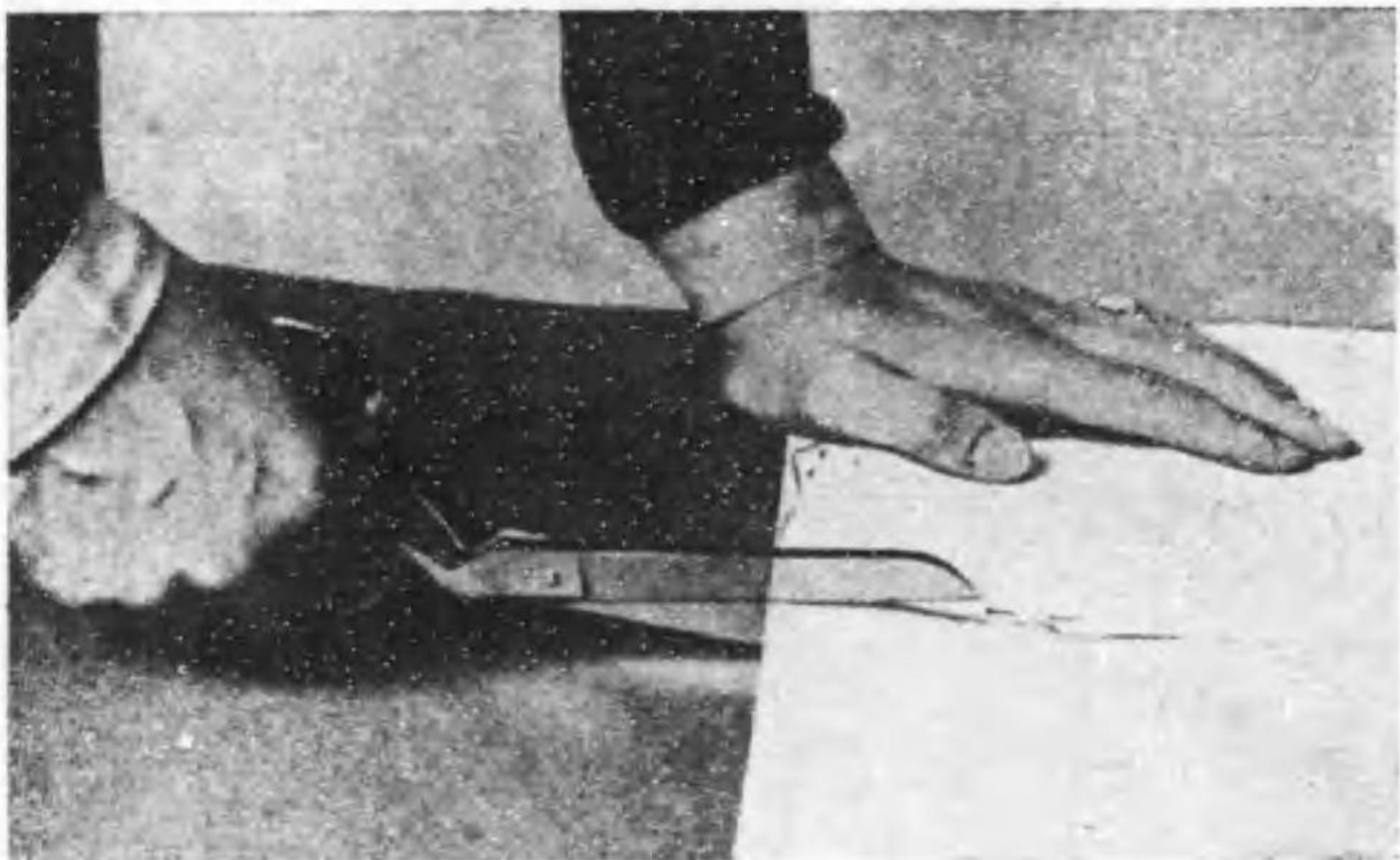
先づなるべく大きなテーブルを隅々までよく拭いて、部屋の明るい處に据へ、そのテーブルの周りを自由に歩ける様にして置きます。出来る事なら部屋には他人を入れない様にし、氣を亂されない様にします。そして裁断の途中で他の用事で仕事を中断することのない様に、初める前に少くも一時間は専心裁断にかゝれると云ふ都合を見

計らつて初めて裁断にとりかゝるが、いゝのです。仕事にかゝる前に必要な一切の道具を側の小さなテーブルの上に、落ちなく集めてのせて置きます。裁断鋏、小型鋏、それにピンをたつぷりと、出来れば針さし、テーブ尺、ルレットか又はチョークなどを備へて置きます。

この針さしは、裁断をする時に便利に出来てゐるものが望ましいので、(例へば裁断者の身體につけて歩けるもの)ですからいつでも直ちにピンを使へて、ピンを探し廻ら

なくてもいゝ様な仕組のものがほしいのです。それには二通の型が工夫されてゐますが、そう云ふものは買ふと云つても直ぐ手に入らないでせうから、自分で作るが、いゝと思ひます。一つは腕輪型の針さしです。譯なく作れます十厘巾の布片を二枚輪にして、之を縫ひ合はせ、その間にかたく糠を填めるのです。但し糠を填める前に、その袋の中に巾八・七厘の薄手のボール紙の輪になつたものを挿し込み、針さしの下側にところゝ縫ひ付けて置きます。そして左の手首にあてがふのです。

もう一つの針さしは、首の周り胸の附近に垂れ下げるものです。これこそ



第四圖 生地を裁断する際の手と鋏の正しき位置

十分もあれば容易に作れるもので、安フランネルの細ぎれを（七・五種乃至一〇種巾の）ロール巻きの様に巻いて、その上を巾廣のリボンで丁度花火の筒の様な工合に被ひます。丁度張り切つた堅いソーセージの様なものが出来上るのですが、之は針がしつかりと刺さつて、垂れ下つたり抜け落ちたりすることはありません。

これですつかり準備が出来上つた譯です。そこで愈々裁断に取かゝるのですが、型紙を開いて置き、何枚でどんな形のものかを一應調べます。そして不要な部分又は後で裁つもの、或は別の生地で裁つものは、一應取りのけて置きます。そして型紙に附記してある注意書を読み、縫代がとつてあるかどうかを調べ、とつてあれば此際充分とつてあるかどうかを更に調べて置きます。

型紙によると縫代の取つてないのがあります。（註——「洋服春秋」の型紙は縫代は取つてありません）此の場合は型紙を生地の上に載せた時縫代を適當にとらねばなりません。縫代があらかじめとつてあつても、普通型紙は縫代がせま過ぎるさしひがありますから、慣れてゐない家庭ドレスメーカーは、殊に、トウイード（スコッチ式のもの）やシャッキング（山東絹）の様なほぐれ易い生地を扱ふ場合には特に、少々巾廣にとつて置く方が賢明です。先づ六耗位は餘分にとつて置きます。

縫代を餘分にとつて置けば置く程、假縫の際にそれだけ融通がつく事になり、身體付のむつかしい人などの場合樂になります。が、さりとて、餘り餘分にとればそれだけ生地が無駄になるばかりでなく、型のもつ、線を崩す惧のあることを一方に氣を付けねばなりません。

生地をテーブルの上に展げます。殆どどんな場合でも、生地は縦に折つて兩側の織耳をきちんと合はせて置くのが普通です（この點念のため綜合圖を見て調べること）此際生地の中の折目をほんとの中央と思つてあてにしてはいけません。往々さう

でないことがありますから。大體此の際に、こう云ふ怪しげな折目はアイロンをかけて消して置く方がいゝので、それでないとならぬにそれを感じられる事があります。

兩側の織耳を合せたのに十三四種位置きにピンを打ち、かたはら中央の折目の線が生地の上に真直ぐになつてゐるかどうかを目を配ります。

さて型紙を残らず生地の上に載せます。此の際型紙に附いてゐる綜合圖を見乍らその通りに置くのですが、綜合圖は一番經濟的な置き方になつてゐます。然し綜合圖のものとの異なる生地を使ふならば自分で置き方を工夫すべきです。ですから拔目なく經濟的に生地を使はうとするなら、型紙の全部を生地の上に並べてこれでいゝとなつて初めて裁つので、一つ一つ裁つたりしてはいけません。

袖の型紙を置く場合には、生地の中の織糸が、袖の肩の最高部から手首へかけて真直ぐに走つてゐる様にするのです。言ひかへれば、袖の縦の中心線が織耳と平行になつてゐねばならぬと云ふ譯です。（第三圖参照）時によると袖を幾分斜に寝かすと生地が少々儉約出来ると思はれる場合がありますが、そんな事をすればおしまいです。着た時に、皺になつたりよじれたりします。そうならばもう直す方法はありません。

こうして型紙を全部生地の上に置き並べてから、ピンで二枚になつてゐる生地をしつかりとしかも大まかに止めます。

ところでベルベットは、必ず鋼製のピンか細い針で止めることです。真鍮のピンを使ふと此の生地には永久にとれない跡がつく惧があります。それから又ベルベットでは、毛が同じ方向に寝てゐるかどうか、そしてその上に型紙の全部が載つてゐるかどうかと云ふ事に留意します。

かくして愈々裁断にかゝります。

鉄は大型のものを用ひ、裁断専用にして他の事には使はぬが宜しい、小さな鉄では

綺麗な線が出ません。そればかりではなく第一手が痛くなります。鋏は鋭利のものを
用ひないと切り端がギザギザになります。薄い生地などになると、生地を引曳つてつ
れる様な事になります。いつも研がして置くのを忘れぬ様に。

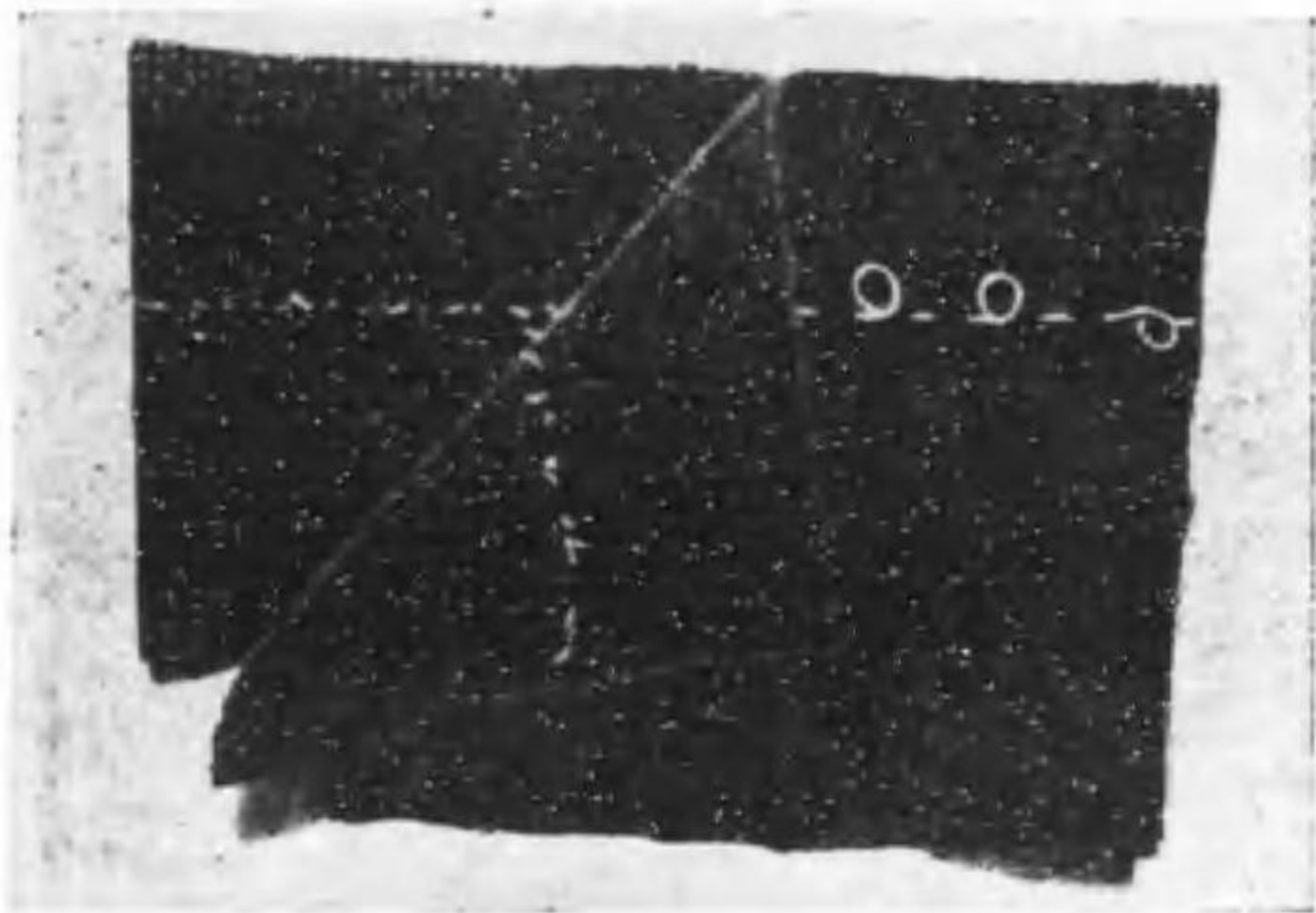
第四圖に示す様になるべく生地と鋏とはテーブルの上に載せて裁ち、鋏を動かす程
度だけ生地を上にもち上げる様にします。(註——素人はよく不精をして墨の上やソファの上な
どで裁つ事がありますが、之は絶対禁物です。又生地がふれて垂れ下がる様な小さなテーブルもいけません。
止むを得ない時、床の上でやるのはまだ許せます。テーブルでも床の上でも必ず紙を生地の下に敷き鋏の滑りを
よくします。) その際左手を生地の上に載せて、生地が不必要にもち上らない様押へる役
目をさせます。同時に鋏は刃の中央で切つて尖端の方で切らない様にして下さい。圖
に示す通りです。そして刃に大小があれば狭い方の刃をテーブルの上にあてが、廣い
方の刃もしくは刃の丸くなつてゐる方を生地の上にあてがひます。
型紙について一つ一つを裁ち乍ら、順に型紙を生地に付けたまゝきちんと積み重ね
て置き、切屑の役に立たないのは捨て、少し大きな切端は後に役に立つ事もあります
から保存して置きます。

第三章 躰と標付け

「躰に念を入れて置くと結局時間の節約」になると云ふ事は、ドレスメーカーの常
に覺へてゐてもらひたい心得です。ともすれば、しつけを面倒臭がついて、加減にす
るのが、素人洋裁家の癖ですから。

躰は、その服がどんな風の線でもどんな風に身體に適ふかと云ふ見當が、早くから正
確に付くと云ふ利益があるのみならず。このしつけで縫ぎ合はした縫目は、最後の仕
上の時ミシンをかけるに時間と手間とを大變に省くことが出来ます。

正確な躰、しかもたつぷりと充分にしつけをして置く事、これがドレスメーカーキング
の秘訣の一つです。



第五圖 切しつけを切つて下の生地を引き離す圖

すると躰に正確不正確とはおかしい、どつち
へ轉んでも躰は一つの方法しかないじやない
かと思ふ人があるかも知れません。しかし實際
は、躰の仕方には、その目的の如何によつて色
々な種類があるのです。少くもその内で普通必
要な仕方が四種類あると思ひます。それを順々
に此の章で解説致しませう。

第一番に習得して置かねばならぬのは、切し
つけの方法です。それは重ねた生地の二枚とも
同時に、型紙の各種の標、即ち縫目の線、ダート
切り目、ブリーツなどを標し付けるのが目的で

す。ある種の生地、例へば木綿ものとかある交織ものなどには、ルレットかチョークの方が、その目的のためには、早手廻しですがそれは後で説明しませう。

毛織もの、ベルベット、それに大抵の絹には、この切しつけが最も適當です。極めて簡単な素直な針の動かし方ですが、第五圖に示す通りの方法です。切しつけには木綿のしつけ糸(しろも)を二本にして長いものを用ゐます。そして糸の端に結びを作つて縫初めるのもいゝが、それを作らずに、縫初めに糸を二重にかゝつてから縫かゝつてもいゝのです。

裁斷した生地を、その上に型紙をピンで止めたまゝで、テーブルの上に平らに展げます。そして型紙の縁をぐるつと縫目を標するためにしつけます。その際針目は細かくし、一つ置きに糸を充分に緩ませて糸の輪が出来位にして置きます。糸は二枚の生地の両面に通つてゐる様に氣をつけねばなりません。

それから生地の両面を靜かに引き放し、しつけ糸の輪の延びて引張られる迄にします。そしてその間を鉄でしつけを切り放して行くのです。すると生地の両面とも残つたしつけ糸で同じ様に標が付いてゐる事になります。

以上は型紙に縫代がとつてない時の話で、それなればこそ型紙の縁の周りをしつけしたのです。勿論その際には前述の通りに、自分で適當に縫代をとつて置かねばなりません。

型紙に縫代がとつてある時には自然型紙の縁と生地の縁とは一致しますから、生地をしつける際に、どの位縫代をとるべきかを見極めねばなりません。とにかくどんな種類の型紙を用ひようとも、ダーツ、ブリーツ、切目などを標するには、この切りしつけを用ひます。

ダーツや切目をしつけると型紙がその間に介在してゐるのですから、型紙を後で

切り取つて了はねばなりません。型紙を、何度も利用したい人には、これは痛手でせう。ですからダーツで一方が縁に接してゐるものならば、初め型紙の一方のピンをはずしてしつけをし、しつけをしてつたらそれを前通りピンで止め、それから片側のピンをはずして、前通りの方法を繰返せば、型紙を生かすことが出来ませう。然しそれはどう考へてもほめた方法ではありませんし、細腰廻りのダーツやスリツツなどの様に全く外に首を出してゐないものになると全然不可能な方法です。



第六圖 型紙を折返し定規とチョークを用ひて肩のダーツの位置を標付ける圖

確かに、それには誰もが迷ふでせう。と云ふのは洋裁の書物には不思議に、この點には胡麻化して沈黙をまもつてゐるのですから。然し生地のどつち側に切りしつけをつけても構はないものだと思ふ事を知つてゐるさへすれば、立派に方法があるのであります。それはこうすればいゝのです。型紙の上の線に沿つて一列にピンを留めます。型紙と生地の両面につき通る様に。そして生地を型紙のついてゐない側に返して、ピンの先端を辿つてチョークで標をつけます。そこで型紙とピンとをとりはずして、チョークの線をたどつてしつければいゝのです。

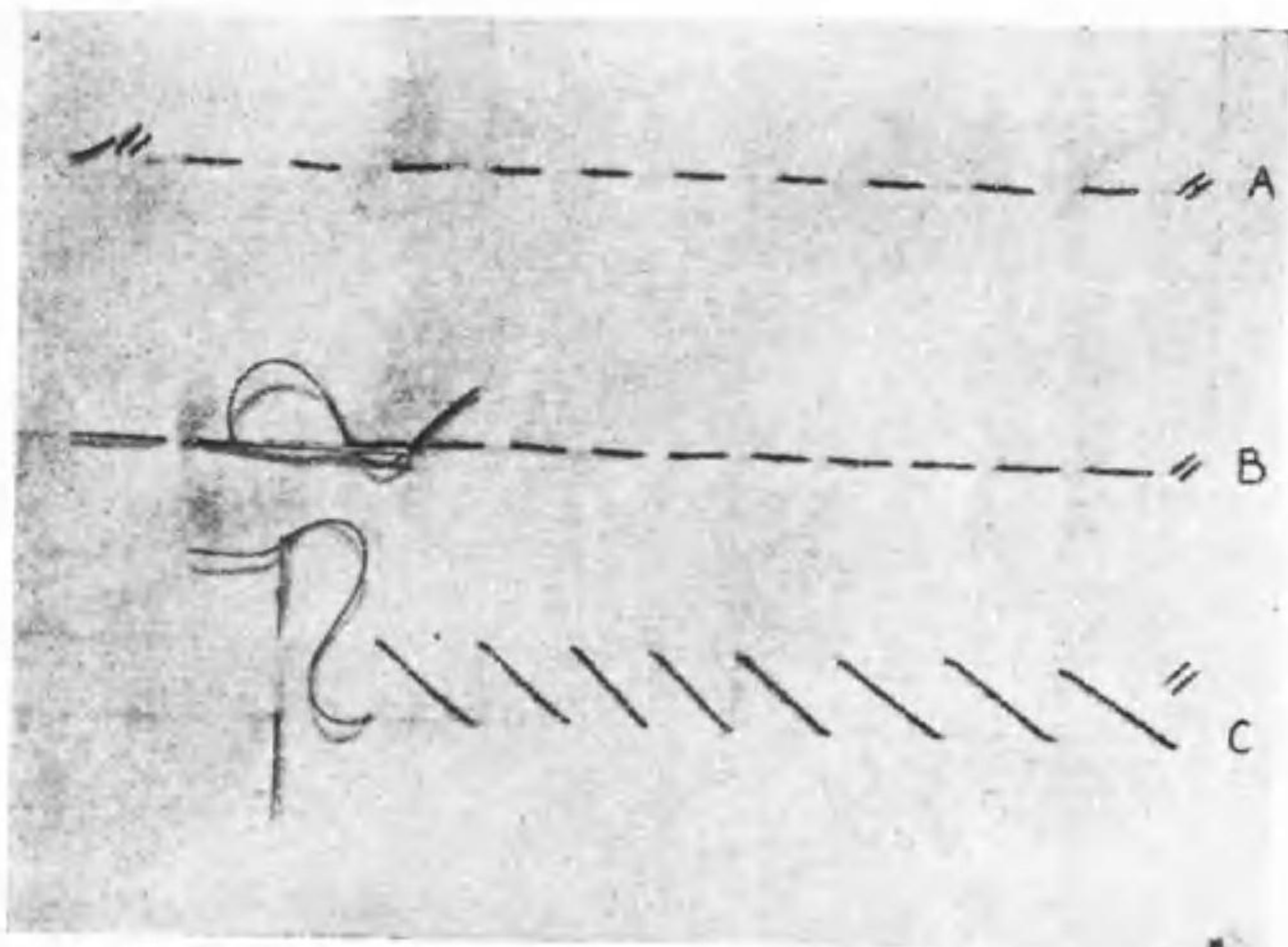
(註) 又こう云ふ方法があります。先づ型紙の上に出でるしつけ糸の輪を一つ一つ鉄で切れば型紙は端に引きはづせすから、先きにこうして型紙を割がして置き、それから生地の中間のしつけを切り放す方法です。これは至極簡単な方法です。

又もう一つの方法があります。之は全然中にある標ではなく、幾分縁に頭を出してゐるものに就ての話ですが、第六圖がそれです。型紙をそのままに置いて、ダーツの線の終點になつてゐる生地の縁の處にチョークで標して、それから型紙のピンをはづして型紙をダーツの尖端の處まで、或はブリーツの内側の端の處までまくり返し、その點から、先きに付けて置いた縁の標までを丁規で結び、その線をチョークで引き、しつけする方法です。

こゝで一言ルレットもしくはチョーク(細い線を引くため尖端をとがらかして削つてある)で標をつける事について述べて置きます。

それは何れも非常に安價のもので、どこの洋装材料店でも賣つてゐます。ルレットは齒車を廻轉させ乍ら生地の上に壓しつけて行くもので、適當に指で押し行けば、小さな孔が線を標し乍ら、生地の両面に付くものです。これは以前は大變よく使はれたものですが、今はそれ程でもなくなりました。と云ふのはルレットは大體木綿ものに適當なのですが、近來は下着にも夏の上衣にも木綿ものが下火になつて、各種の絹物が巾をきかして來たからです。然しとにかくもルレットは仕事が早くつて容易です。それに木綿物でドレスを作るにふさはしい安價な器具です。絹や交織ものでも、ものによつては使へないことはありませんが、鋭い刃ですから絹糸を切り破る惧がありますから、先づはし布片で試して見てからにして下さい。

ルレットは又上側の生地には立派に標はつくが、下側の生地まで標が通らない場合が往々あります。此の際は上側の生地に標した後で、ピンを一系列に眞直ぐにさし、生



第七圖 (A)平標 (B)一目落し標 (C)斜標

地を返してそのピンについてルレットを押しします。然しルレットをピンの上に走らせてはいけません。刃が曲がり、その上生地にきたない標をつけます、然し大體生地両面に一緒にルレットで標が付きそうもなければ、切りしつけでやる方が慥巧です。

(註) 外國では使はない様ですが、我國の裁縫師が又一つの便利な器具です。絹物、木綿物にはこれで充分よく標付けが出来ます。

洋裁用チョークは簡單で仕事が早く出来る一つの方法です。然しチョークは扱つてゐる内にあつてなく消し飛んで了うのが缺點です。ですから切りしつけの線の下圖を標す時に一番役に立ちませう。

とにかく、切りしつけは初めは手間のかゝるものかと思はれますが、これこそどんな場合にも使はれる唯一の方法と云つていゝと思ひます。誰でも洋裁を手がけて行く内に自然とその方法だけに頼る様になるものです。

切りしつけは勿論縫目や生地部分を一時的に縫ぎ合はすためか、或は型紙の標をつける爲に用ひる方法で、縫合はして假

縫ひする目的のためには、平縫ひ（イーブン・タッキング）一目落し縫ひ（アンイーブン・タッキング）それに斜縫ひ（ダイアゴナル・タッキング）を用ひなければなりません。これ等は何れも簡単な方法で、第七圖に示した通りのものです。

手縫ひは生地を両面とも同じ長さの針道です。糸を留めるには二針だけ斜に縫ひかへします。（之は一目落し縫ひや斜縫ひの場合も同様）この手縫ひは、例へばアンダーアーム、肩、腰廻などを假縫する時の様に、しつけ糸に引張りがかかる様な場合に、二枚の生地を縫ひ合わせるに用ひるのです。

一目落し縫ひは、平縫ひより仕事は早く出来たす。ですから、ドレスにフラウンス（裾飾）やフラット・カラーをしつける様な場合、即ち引つれが来ない様な部分にはどこでも盛に用ひられます。針道が長短交互にある縫方です。

斜縫ひは、二つの線と一緒にしつける時、二枚以上の生地を平らにしつかりとちつける時、能率的な方法です。この際生地が一枚でも、平になつてゐないといけませんから、氣を付ける事です。

糸はしつけ専用の糸を用ひるのが便利で、切るに容易く材料の中に埋もれもせず、その上縫糸よりも安價です。

普通しつけ糸は白を用ひる事が多いのですが、生地によると目立たすために色糸を用ひます。又特に、生地の色とはつきり區別出来る様な色の糸を用ひるのもいゝ事です。しつけは實際の縫目の線より幾分外側にしてミシンをかける時その縫目の線がはつきり判る様にします。ベルベットに木綿糸でしつけすると毛が寝て跡がつかますから、之には絹糸でやります。

しつけ糸をとる時には、一方の端の糸をゆるめるか又は切つて、糸を引抜きます。そのために初めに糸の端に結びこぶを作つてあるよりも、二重に糸を返して縫ひとめ

てある方が便利だと云ふのです。長めのしつけ糸はそれを糸巻に巻いて何度も繰返して用ひます。

然しデリケートな生地やカーブの部分やブリーツの處などは、しつけ糸を引張つてとつてはいけません。生地がゆがんで形なしになります。その代りに短かい間隔に缺でしつけを切つて順々に抜いて行けばいゝのです。

ピンセットか毛抜を用ひるのもしつけをとるのに便利でせう。時間が省けます。

しつけは假縫中又は本縫のかゝり初め頃にカーブのゆがむのを防ぐためにも、使はれます。ですから標をつけて了つて、型紙をとりはづしたら直ちに、頸や袖ぐりの周囲その他カーブした線或は斜にきつた線などをしつけをして置くのは、大變いゝ事です。この際は糸は充分に引張つて緩みのない様にする事が肝心です。但し引張り過ぎ

て丁度一杯に取つた寸法を縮めてはいけません。

最後に一言付け加へて置きますが、上衣の前後の中央線（センター・フロント並にセンター・バック）にそれぞれしつけをして置く事です。その線を全部連続してしつけしなくとも所々その線の標になる様に、しつけて置きます。之が何のたしになるかは後章で判りませう。



第八圖 人臺に綿をあてがふ圖

第四章 假縫

自分で自分の服を仕立てる最大の利益の一つは、假縫を完全にして、身體にびつたりしたものを作る點にあります。既成品を買つて身體にびつたりと適ふか適はぬか運を天に任せると云ふ様なことをすべきではないのです。ホームメイドは身體に合はせて作るのですから、とにかく恰好はづつとよくなります。そして、もちも大變違ひます。それはよく身體に適つてゐると服地に無理な張力がかゝつて來ないからです。

大抵の場合假縫をして身體に適はせるのは、自分で自分に適はせねばならぬ場合が多いと思ひます。一度それに慣れば他人の身體に假縫をして適はせる事は、朝飯前です。ですからこの章では自身の身體に適はせる方法を説明することにしませう。

手間と面倒を省く方法は、自分の身體に寸法の極く似か寄つてゐる人臺に着せて見る事です。この人臺は身體に完全に適はせる上の最も忠實な助手と云つてもいいと思ひます。鏡に向つて自身で着て見て形を見るより遙かにはつきりと色々な點が解ります。

この道具を使へば、色々な弱點が容易に發見されます。殊に頸の部分の弱點はこれで見なければ判りません。そしてそのまま直すことが出來ます。

普通の人臺の外に變り型として自由に伸縮出來る人臺があつて人の身體の大小に合はすことが出來る様になつてゐます。家族用として都合がよい事もありますが、値も張りますから一般向ではありません。

人臺は身體に丁度適つたものが必ずあると云ふ譯に行きませんから、その場合はその中で一番身體に適ふと思はれるものの内で、小さい方を買つて來て、それを自身

の手で身體にきちんと適ふボディイス(胴着)を作りそれを人臺に着せ、丁度野球のグローブの様に必要な部分に填物をします。

その人臺を修正するには、自分の身體にきちんと適つた元型を用ひて丈夫な麻布でボディイス(胴着)を作ります。そして自身の身體に適つてゐるかどうかを他人に見てもらひます。そして袖は大抵人臺には付いてゐませんが、自身で作つて填物をします。袖を作らない時はボディイスの填物が落ちない様に布片で袖ぐりの處をとり付けて了ひます。

ボディイスが出來上つたらば、それを人臺に着せる前に、先づ人臺に必要な部分に綿を巻き、それを人臺のカバーにピンで止めるか、しつけをするかします。(第八圖第九圖参照)

人臺をもち合せない場合には、どうすればいいかと云へば全身の映る姿見(鏡)に轉るより仕方がありません。夜でも晝でも光線のよく取れる様な場所で、大型の鏡を助けにして後姿まで自分で調べるのです。

「假縫は二度」と云ふのは、専門洋服屋の規則ですが、素人は、三度も四度も假縫



第九圖 綿を填めた人臺に着せた麻布のボディイス

をすることを薦めます。殊に身體付きのむつかしい人には猶更です。大體第一回の假縫では、主要な點を調べ、第二回にその他の細かい點を檢

査するものとされてゐますが、慣れてゐない素人には、一度に色々な点を見るのは無理ですから、何回も假縫して、少しづつ調べて行くのがいいと思ひます。例へば第一回に肩と胸、第二回にスカートの袖、第三回に袖……と云ふ風にやつて行きます。

然し参考までに、二回で始末をする時のやり方を説明して置きましょう。それですればそれに越した事はないのですから。

第一回の假縫をすすまでは假令どんな僅かな部分でも本縫をしないことは云ふ迄もありとせん。前章で述べた切しつけと標付けがすんだらば、假縫の準備をします。即ち第一に先づ肩のダーツをしつけ、次に前後の肩をしつけ合はし、アンダーアームの線を縫ひ合はしその他各所主要な部分をしつけ合はし、袖の縫目はしつけますが、その時にはまだ、袖を袖ぐりにしつけしないで置きます。

こうしたものを自身の身體か或は人臺に着せて、肩、袖ぐり、細腰、腰、袖などの調子を見、必要ならば直します。こゝで初めて一方の袖を腕に着せかけて見て假りに肩にピンで止め、長さとも巾と垂れ工合を調べます。

第二回の假縫では、もうその際は、主要な縫目は本縫にかけ、袖もしつけをしてゐる時ですが、カラーを立派にしつけて置いてその適否を検査し、その上袖の手首、飾、ベルト、裾の折返しを調べます。

この際注意して置きますが、一般に原則として、異つた生地は生地毎に別々に假縫をするのが常則です。毛織物は地厚のもので不格恰に見せたくないならば、むしろきちんと身に付けて仕立てるがいいのです。ところが木綿ものやリネンは洗濯して縮まるのを見越してむしろ幾分ゆつくりして置かねばなりません。絹はびつたりと身に付く様にしますが、人絹は比較的緩やかにします。

假縫の細い點に關しては一つの規則があります。上衣とかその他のもので、垂れ工合

と着こなしをよくするには、生地の縦糸が前後の中央線（センター・フロントとセンター・バック）を真直ぐに流れる様にしなければいけません。しつけの説明の際に前後の中央線のしつけをどうこうと云ひましたのもこのためです。同様に生地の横糸は胸と腰の部分で水平になつてゐなければなりません。この水平線もしつけをして付いてもいいのですが、それまでしなくとも垂直のしつけがあればそれが水平かどうかは目で見て譯なく判定がつきます。

大體、皺とか、垂れ下がりとかが、引つれなどの出来るのは、此等の基本的な諸點に織糸が歪んでゐるためなのです。此點を忘れない様にして置きます。ですから結局假縫と云ふものは、各部分を上げたり下げたり、又は緩めたりたくつたりして服を垂下げて見て縦横の織糸が、正しい方向に整つてゐるかどうかを調べて見る事だと云へます。



第十圖 (右肩) 肩の皺 (左肩) 肩の縫目を深くして皺を消す

こゝに假縫の一般法則を説明しますが、それには便宜上ディテールに就て六つの場合を擧げて置きます。

(一) 前の首廻りからアンダーアームまでの間の斜の皺もしくは後のむしろ垂直に近い皺は着る人の肩が型紙の肩よりも撫で肩だからです。

この際はその上衣を胸廻りの處でスリッパにピンで止めます。但し胸廻りをぐるりと同じ横糸をたどつてピンで止めるのを忘れぬ様に。もし

て肩のしつけをとり外します。ピンで止めた胸廻線からドレスの前身頃を兩肩に向つて上の方に皺を伸ばして行き、スリツプに各處でピン止めをして置きます。

それから他人に着せて後身頃に同様な手縫きをとります。そして前後の皺を伸ばし乍ら肩の縫目を更めてピンで標を付けます。すると縫目が袖のぐり處で頸廻りの處よりも著しく深くなり、皺はなくなつて了ひます。(第十圖参照)それに又袖ぐりの附近で横糸が切れ下つてゐたのがすつかり直つてゐるのに気がつくでせう。

(二) 兩肩からセンター・フロントとセンター・バックにかけての斜の皺は、前記(一)の丁度逆な弱點を示してゐます。即ち着る人の肩が型紙の肩より角張つてゐる場合です。前同様な直し方をすればいゝのですが、肩の縫目を直してピンを止め直すと、首廻りの部分が袖ぐりの部分よりも縫目が深くなつて來ます。

以上の二つの例で判る様に、前章で強説して置いたことですが、ドレスのあらゆる部分に縫代を充分にとつて置く事の必要が痛感される譯です。必要の際に小々ならばいつでも融通の付く様に縫代は深くとつて置かねばなりません。

更めてこゝで注意して置きますが、肩の假縫を念入りにすると云ふことは、非常に肝要な事で細腰の部分がびつたり付いてゐる場合はともかく、そうでない限りは、上衣は全體が此の點即ち肩に懸つてゐるのです。ですから肩の部分でびつたり出來上つてゐなければ、それから下の部分が、どんなによく身體に適つてゐても、殆ど何にも役に立ちません。ですから假縫の最初に、何よりも先づ此の點に念には念を入れねばなりません。

ドレスのスタイルの如何に拘らず、胸廻りから上の方はびつたりと身體に適つてゐなければならぬ事は原則です。之を忘れずにゐれば萬事が樂に運びます。胸部や肩の廻りが緩んでゐると、ドレスは正しい垂れ下がりをしません。身體の姿態を變へる度

に必ずそう云ふドレスは前後にふはくと動きません。

胸部(首から胸廻り線までの部分)が緩る過ぎる場合には肩の縫目から下に走つてゐるダーツ(もしくはギャザー)が、それを調整するためにあるのだと云ふ事を忘れずにゐればいゝと思ひます。ダーツを型紙の示すよりも廣くかつたり、狭くかつたり、或は長くとつたり短くとつたりして、加減をすれば、どんな人にもびつたりと適はず事が出來ます。

後の上部の部分がたるんでゐる場合には、首の後の中央線の處で、三つか四つの小さなタツク(襷)をとり(タツクは垂直に下へ走らせるか、又は放射線狀にするか何れでも宜しい)それを六種位下へ向け走らせればいゝのです。此の直し方は、稍丸型の肩の人には、屢々用ひられる方法です。

次にそれ以外の點に就て説明しませう。

(三) 細腰の直ぐ下の部分で、ドレスが中たるみになるのは、後身頃の丈に餘分のもので出來たからです。と云ふのは着る人の姿勢が反り過ぎてゐるか、或は又後の細腰線の處に、普通よりも餘計に身體付が中くぼみになつてゐるのが原因でせう。

此の際にもしもスカーツが上衣と別々に裁つてあるものならば、後の部分をピーター・シャム・ベルトの上までたつぷりと釣り上げて腰の後で織糸が水平になるまでにします。(上衣にとち付けてあるものならば上衣の下の線の上まで引上げます)それは大體の分量を後の中央線の處で釣上げて、兩側の脇の縫目の方に向けて次第に釣上げ方を減らして行きます。

それがもし、ドレスの後身頃が、首から裾まで一つのものとして裁つてあるとすれば、釣上げるのは肩でするより外はありません。生地横糸が細腰の下で水平になる迄、後身頃全體を平均に釣上げて、各所をピンで宜しく止めます。そして肩のピンを

止め變へます。すると肩の縫目の縫代は、後身頃の方が前よりも断然深くなり、中垂るみがなくなつてゐることが解ります。その際首廻りの後は、前より稍深く裁ち切る必要がありませう。

(四) 袖ぐりの部分が引つるのは、袖ぐりがきつく締め過ぎてあるのか、さもなければ、腕の下の處が上り過ぎてゐるからです。もしもそれまでに肩やアンダーアームの縫目には缺點がなく少しも手を付けずそのまま立派なものであるとすれば、その肩の縫目かアンダーアームの縫目かを、或はその兩方を一緒に稍緩めればいゝのです。兩方一緒に緩めるならば必要な緩みの四分の一だけ各縫目のそれぞれの部分に緩みをとればいゝ事になります。例へば袖ぐりが二、五種だけ小さいとすれば、肩の前後の部分アンダーアームの前後の部分、都合四つの部分にそれ／＼六耗だけ緩みをとればいゝことになります。

もし肩とアンダーアームの縫目とが検査済みで今更それに手入をするのは好ましくない場合には、袖ぐりの縁の窮屈な部分を、縁に直角に剪み切ります。然し餘り深く切らない様に窮屈なのが樂になる程度に止めなければいけません。そしてその結果袖ぐりのカーブの形が崩れぬ様同時に注意致します。

然し袖ぐりの廻りのふくらみや皺の手入をするにはこの方法ではいけません。と云ふのはそれは、胸か肩の部分がうまく適つてゐないから起る弱點だからです。ですからその原因となる根源を直すべきで、袖ぐりを扱つてはなりません。

袖を合はせるには、袖の縫目とアンダーアームの縫目との位置の關係が、正しい状態にあるどうかに注意することです。ある時にはこの縫目の位置が一致してゐる時もあるし、又往々にして袖の縫目が、アンダーアームの縫目より幾分前の方に近い位置にある時もあります。こうした位置は大體型紙の上で示されてゐるものですから、し

つけをする時にその標を正確につけて置きさへすれば、袖を正しい位置にもつて行く事は譯のない仕事です。その外袖の丈けや巾が丁度いゝか、袖の垂れ下がりが工合が全體として申分ないかどうかを調べます。

(五) 袖が肩になだらかに平らにとぢ合はされてゐなければならぬのに、袖山の處で脹れ上つてゐることがあります。之は素人のよくやる失敗です。そして一番よくない失敗です。普通それは袖の縫寄せ(ひだ)の仕方が間違つてゐるために起るものですが、時には又袖の肩のカーブが、着る人の肩が撫で肩のために深過ぎる形となりそのために起ることがあります。

然し都合のいゝ事に、そのどつちの場合でも、容易に直すことが出来るのです。袖のしつけをほどこいて、原因がどこにあるかを見當付けます。大體素人は着て見て假縫をする時に、袖付を小さくいかに卒のない様にするに云ふ事にはとかく餘り頭を使はないもので、袖山のギャザーがいつも念入りに調べ且直してありません。假縫をして各所を調べる際にも、この袖の部分だけに特に注意する必要があります。

然し袖のギャザーの不恰好なのは、袖ぐりに比して袖が大き過ぎることに原因します。大體袖が袖ぐりより五種以上大きいとなれば、そうした事が起るものと考へて差支ありません。この場合には、袖の縫目が必要な分量だけつめるのです。

もし又袖山のカーブが深過ぎるところに病源があるとすれば、これを少し狭めればいゝでせう。ですがこの際氣を付けねばならぬのは極く少しづつめて行つて調子を見ながら行く事です。一度つめ過ぎると取返しはつきません。そして普通は僅かにつめれば大抵いゝ筈です。ツーピース・スリーブでは、もしも袖の縫目の一つの附近で脹れが出来てゐるならば、カーブを切り取る前に少しばかり縫目を緩めるのです。緩めさへすればそれだけで立派に直るでせう。

腕を前後左右に自由に動かして見て、苦しくないならばそれでいとすべきです。

(六) 袖に皺とよじれが出来るのは、特に肘と手首との間で出来るのは、袖の型紙をあてがふ時に、生地縦糸に平行に置かなかつたためか、それでなければ、生地を扱つてゐる間に、或はしつけをする間に縫目が引張られて伸びたためです。前の原因ならば、別に新たに生地を今度は間違なく裁つより外に方法はありませぬ。

第二の原因の場合は、袖をとりつけたまゝで、そのよじれが前の方に向つてよじれてゐるか、それとも後の方によじれてゐるかを見極はめます。そして袖ぐりからとりはづして、その縫目をほどこき、今度は正確に更めてピンを打ち、しつけをかけます。然し袖ぐりの端の處では、一つの端が他方の外側に約一・二厘だけ出張る様に縫目をピンで止め、引つれを緩めるのです。その出張つた端は、袖のよじれが後の方に向いてよじれてゐるならば、前の端でなければなりません。そして前の方に向いてよじれてゐれば、後の端になります。こうして袖を再びきせて見た時に、調子が直つてゐるならば、生地を除つた部分を剪み取ります。然しそうすると袖は元の丈けより極少しではありますが短くなるものです。

勿論以上説明した六つの例で、一切の問題が氷解するものではありません。残らず各部分に就て説明する餘裕のないのを残念に思ひますが、然し、以上説明して来た假縫の法則を應用して行けば、その他の點に就ても必ず正しい知慧が出て来るものと思ひます。

昭和十一年九月一日印刷

昭和十一年九月十日發行

不許複製

アマチュア洋裁讀本 第一巻

定價 四十錢

東京市豊島區雜司ヶ谷七ノ一一一七

著作兼發行人

小池 四郎

東京市神田區錦町二ノ七 中興舎

印刷人

宮田 高次

東京市豊島區雜司ヶ谷七ノ一一一七

發行所

クララ洋裁學院出版部

電話 大塚 三九二〇番

振替東京四六〇二二番

終

